

## 漱石と魯迅（その一）

——中国講演の旅（上海篇）——

鳥井正晴

\*上海へ

春、まだ薄き三月二十三日（一九九四・平成六年）、私達四人は、機上の人となった。上海まで二時間のフライト、その近さ・便利さを今更ながら思う。

のちに魯迅終焉の地となるこの地を、いわゆる上海魯迅詣だと称して、幾多の文人（横光利一、武者小路実篤、賀川豊彦等）が訪<sup>まじ</sup>ったが、果たして彼等は、如何程の時間を要したことだろう。

私達は、上海師範大学、杭州大学、浙江大学より招聘されての（漱石講演）と、魯迅の故郷・紹興を訪ねる旅である。

\* 国家の留学生・漱石と魯迅

二十世紀は、一九〇二年（明治三十四年）より始まるが、一九〇二年四月、魯迅は医学を学ぶべく横浜に到着する。片や漱石は、二年にわたる英国留学を終え、一九〇三年一月、帰国する。時に、魯迅二十歳、漱石三十六歳。

魯迅の、日本留学中（二十歳〜二十七歳）に、漱石に示した関心は並々ではない。「吾輩は猫である」、「漾虚集」、「鴉籠」（坊っちゃん）、「二百十日」、「草枕」の購入はもとより、加えて学理書「文学論」までも、そして新聞連載の「虞美人草」を読むために、「朝日新聞」を定期購読したとは、弟・周作人の伝えるところである。

漱石と魯迅（その一）

また、魯迅が明治四十一年（二九〇八年）四月より、一年足らず住んだ家（東京市本郷区西片町十番地ろノ七号）は、漱石が住んだ（明治三十九年十二月〜明治四十年九月）家である。

\*海を渡れる主意を越えて

「官命を帯びて遠く海を渡れる主意」（『文学論』序）は、漱石にあつては「英文学」を、魯迅にあつては「医学」を修め、必ず国家に有能な臣民たらんことであつた。

しかし、魯迅は日本留学中に、漱石は留学を終えたのちに、その「主意」が変貌を遂げる。即ち、魯迅は医学を捨て「文学」を選び、漱石も学問を辞め「文学」（創作）を選ぶ。

後進国・中国を救済できるのは、医学ではなく、国民の精神を感化できる「文学」こそがという、「文学」に立てた魯迅の熱い志である。

漱石にあつても、「白井道也は文学者である」、「野分」（明治四十年）冒頭のこの宣言に象徴的な様に、「文学」は、「苟も文学を以て生命とするものならば単に美といふ丈では満足が出来ない。（中略）死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい」（明治三十九年、鈴木三重吉宛書簡）という風が、からだの深奥より吹き返す。

それは、つまり人間を根源から問い返す、認識にかかずらう命題でもあつて、かくして漱石と魯迅という、日本と中国の二大国民作家が誕生していくのだが、ことはそれ程単純ではないだろう。

（続く）